

---

藤原紀香アフガニスタン基金

---

2006年度・2007年度  
活動報告書

---

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

---





## 1. アフガニスタンの現況

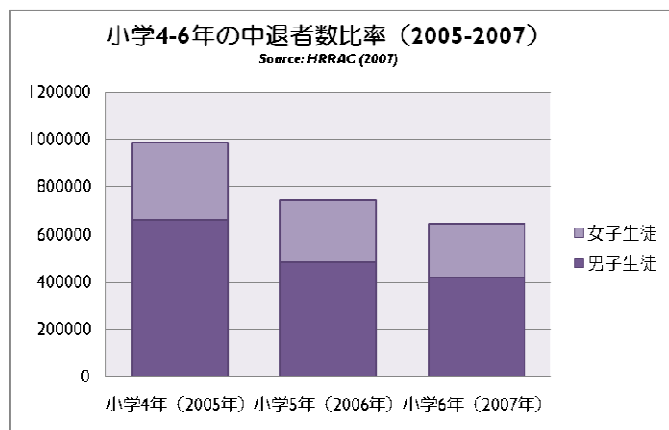
2006年以降、アフガニスタンの治安情勢は混迷の度を深め、政治的不和や復興の遅れが原因で、国内全土で自爆テロや爆発、武力闘争が頻発している。南部のカンダハル州や東部のパキスタン国境沿いでは、再び勢力を拡大させている反体制武装勢力と北大西洋条約機構(NATO)駐留軍との戦闘が激化している。一方、首都カブールでも国際治安支援部隊 (ISAF) や政府関係者、援助団体を標的としたテロや武装強盗事件が相次いでいる。自爆テロの件数は2006年12月から2007年9月の間でおよそ119件まで達し、その数と脅威は前年を上回り、今後も予断を許さない状況が続いている。



## 2. アフガニスタンの教育問題

アフガニスタンでは2007年度の新学期に、戦乱の影響でこれまで学校に通えなかった子どもたちを含む延べ608万人が公立学校に戻ったとされている<sup>ii</sup>。この数値は2003年度のほぼ二倍に相当し、教育復興の大きな成果といえる<sup>iii</sup>。

しかし、小学校に通う生徒のうち女子の74%および男子の56%は、小学五年生に達するまでに学校を中退してしまう<sup>iv</sup>。その要因はさまざまで、学校の学習環境の不備や、武力紛争の下で十分な教育訓練を受けることのできなかった学校教員の指導能力欠如、女性教員数の不足などが挙げられる。たとえば、バーミヤン州のような山岳農村地帯では、教員たちは十分な教材や文献にアクセスすることができず、彼らの指導能力を底上げするためには、教員研修の実施や女性教員の養成、教授法の教材提供などが切に求められている。



Source: HRRAC, 2007, Parents and Children Speak Out



## 3. セーブ・ザ・チルドレンの教育支援事業

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ) は、アフガニスタン・バーミヤン州の中央郡・サイガン郡・カマー郡・ヤカウラン郡において子どものための教育支援事業を実施・運営管理・現地視察を行うにあたり、藤原紀香アフガニスタン基金から支援いただいた資金を有効的に活用した。各活動の概要は以下のようになる。

### 3-1. 学校教育改善事業 ～学習環境の整備と教員研修の実施～

2007年春、SCJはサイガン郡の公立学校全18校に対して、およそ1900セットの学習机・いす、教員用の机・いす、キャビネットを提供した。サイガン郡は山岳地帯であり、狭い山路はうねり、資材運搬用のトラックが進입不可能な場合もあった。しかし、村人や学校関係者たちは、家畜のロバを利用したり歩いて山路を往復することで、学校家具を自分たちのコミュニティへ無事に届けることができた。本事業によって、各学校の基本的な学習環境は整備され、延べ5700名の生徒が机・いすを利用し、正しい姿勢で授業を受けることができるようになった。



サイガン郡デモン小学校に机といす、キャビネットを提供した



生徒たちは机といすを利用しながら授業を受けることができるようになった

2007年2月、SCJはサイガン郡およびカマー郡の中学校教員計50名を対象に、数学・物理・パシュトゥー語教科指導研修を実施した。研修参加者たちは講義やグループワーク、模擬授業の実践を通じて3教科の理解度と指導方法の知識を高めた。研修前試験の3教科平均点は25.8点だったのに対し、研修後は平均点が75.8点にまで改善された。本研修により、両郡の中学生延べ1500名が指導能力を持った教員のもとで授業を受けることができるようになった。

2007年3月にはカマー郡の小学校教員計50名（うち女性教員17名）を対象に、7月にはサイガン郡小学校教員計76名（うち女性教員9名）を対象に教授法研修を実施した。教員参加者たちは、本研修を通じて学級管理や指導方法、授業計画についての知識を深め、また同僚たちと意見や経験を交換することで教員としての自信を高めることができた。本事業により、両郡の小学生延べ14,000人が、教授法をきちんと習得した教員たちのもとで授業を受けることができるようになった。

#### ～教員参加者たちの声

「今回の研修は自分の指導方法に自信をつける絶好の機会でした。生徒たちの異なる学習到達レベルに合わせて宿題の内容も変えていくべきであると学び、新学期にむけ意欲がわいてきました。学習熱心な生徒たちが勉強の不得意な生徒たちを助けられる学習環境を出来るだけつくっていきたいと考えています」

カマー郡・ルイサン村・女性教員（19）

「今回の研修では、同じ教員仲間と意見を交換し、はじめて学ぶ内容のものが多かったです。ロールプレイや模擬授業を通じて、他の教員たちがどうやって算数を子どもたちにわかりやすく教えているのか、お互いの知恵を交換する機会を持てたので研修内容には満足しています」

カマー郡・ドゥシャ村・男性教員（49）



小学校教授法研修を受けるサイガン郡の学校教員たち



お互いの経験と知恵を交換するカマー郡の教員たち

### 3-2. 教育啓発事業 ～路上演劇公演の実施～

バーミヤン州内の15歳以上の成人識字率は平均25.5%であり、全国平均29%よりも低く、4人のうち3人が読み書きの出来ない現状を意味している。一方、女子の小学校入学率は全体の29.8%と低く深刻な状況である。SCJはバーミヤン中央郡およびサイガン郡において、親や子ども、学校教員を対象に教育啓発のための路上演劇公演を実施した。「学校へ行こう」「楽しく学ぼう」というメッセージを伝えるため、中央郡で計30公演とサイガン郡で計15公演を行い、延べ11,000人の観衆を集めた。

本事業の実施と併せ、各自治体リーダーや宗教指導者たちが、集会や宗教協議の場で自発的に教育啓発メッセージを村人たちに発信した努力もあり、中央郡の演劇実施10ヶ村では、演劇公演前に不登校だった子ども569名のうち、171名が公演後に不登校を止め定期的に学校に通い始めたという成果を収めることができた。



読み書きの大切さをわかりやすく伝える演劇は、地元のおとな・子どもたちに好評だった

### 3-3. 基礎教育機会の拡充 ～識字教室の開催～

SCJ は、武力紛争や貧困の影響でこれまで読み書きを学ぶことができなかった子どもたちのために識字教室を開催し、彼女・彼らが小学校3学年分の国語（ダリ語）と算数を学ぶ機会をつくってきた。2006年度はサイガン郡19ヶ村の392名（男子202名、女子190名）を対象に、2007年度は同郡10ヶ村の179名の子をを対象に、識字教室を開催している。



SCJの識字教室で、読み書きを一生懸命に学ぶサイガン郡の少女たち



アルファベットを一字ずつ丁寧に書き記す少女

#### ～子どもたちの声～

「家族には家事をする人が他にいないから学校へは行けないの。前までは文字をひとつも知らなかったけれど、今は少しずつアルファベットがわかるようになったわ。授業で緊張することも減ってきたかな。数字も1から100まで数えられるようになったのよ」

フェリシタ（10）



いつも黒板に一番近い場所に座り授業を受けるフェリシタ



村の識字教室に通う仲良しのサブザグル（左）とライロマ

「遠くにいる親戚からの手紙を少し読めるようになったのがとっても嬉しい。識字教室を卒業したら、村に新しくできた学校に通いたい」

サブザグル（12）

「将来、先生になって、村の子どもたちが読み書きができるようにしたい」

ライロマ（13）



## 4. 紀香基金による絵本・副教材支援

### 4-1. 情報格差と教材不足の問題

バーミヤン州は四方を山々に囲まれた山岳農村地帯であり、政治の要衝や開発の進む首都圏や他州から孤立した存在ともいえる。そのため、情報や出版物へのアクセスも他と比べさらに困難な地域である。地元の学校には十分な教材や副教材が行き届いておらず、結果として、生徒たちの読書量や書物を通じての学習量は乏しくなり、また教員たちも教授法の資料や辞書、学術図書にアクセスすることが非常に難しい状況となっている。

### 4-2. ニーズの高い学習教材支援

こうした教育分野における情報量格差を是正するため、SCJ は2007年10月に藤原紀香アフガニスタン基金からの資金をもとに、バーミヤン州の公立学校 2 校と女子識字教室 10 教室、教員資料室に対して学習教材支援を実施した。首都カブールから、ダリ語の学校教材や辞書、絵本など 40ジャンル・86タイトルの計 1,072冊の新品書物を取り寄せ、本棚 2架および絵本箱 10箱の提供を行った。これにより、現地の子どもたちは教科書のみならず百科事典や歴史物語、絵本や詩などを読むことができるようになった。何よりも、読み書き能力だけでなく、子どもたちは書物を通して自然界への興味・関心を深めたり、個人の世界観・想像力をより広げることができるようになった。

一方、教授法に関わる学術書物や独学ドリル、辞書（パシュトゥ語、英語など）、歴史文献、各教科の副教材などが学校の図書室や教員資料室に提供されたことで、教員たちはそれらを普段の授業や自己学習の時間に利用することが可能となった。その結果、教員たちの授業内容のクオリティは改善され、生徒たちが以前よりもわかりやすい授業を受けられることが期待される。

### 4-3. 教材支援の提供先の紹介

#### ～ヤカウラン郡・アンダ村学校～

現在、アンダ村学校は小中一貫校として運営されており、1年生から8年生までの計 208名の女子生徒が通学している。学校長 1名と女性教員 8名が学校管理とクラス運営を担っている。2007年10月にSCJ職員が本事業の初期調査を行ったところ、アンダ村学校校内には図書室はおろか、副教材となる書物や本棚は一切存在しなかった。SCJは、学校長や教員たちのニーズに沿って、7-8年生のカリキュラムで必要となるパシュトゥ語辞典や文法解説書、生徒たちの読書用の小説など計 206冊の学習教材と本棚を提供した。



10月と11月、アンダ村学校の女子生徒たちを訪問した



開校以来、絵本が初めて学校に届けられた



絵本を手に取り読み進める女子生徒



多くの生徒たちにとって絵本を読むのは今回が初めて



藤原紀香さんの写真メッセージがアンダ村の生徒たちの手元に届いた



アンダ村学校に寄贈された本棚と図書。本棚のてっぺんには、写真メッセージが掲げられている



今回、絵本と一緒に、藤原紀香さんのステッカーも各生徒たちに配ることとした

～中央郡・シバトゥ村学校～

シバトゥ村学校には、1年生から9年生までの生徒計304名（男子230名、女子74名）が通っており、学校長を含め計11名の男性教員が各クラスを担当している。教員の中には藤原紀香さんがシバトゥ村を訪問した際に挨拶を交わした者もあり、今回の紀香基金による教材支援もまた学校関係者たちから大いに歓迎され大変感謝された。シバトゥ村学校には図書室があり、図書の管理を任された教員もいた。SCJは、現地の教員たちのニーズに沿って、ダリ語やパシユトゥ語辞書・文法解説書、数学や物理、歴史の副教材など教員向け書物と、生徒向けの小説や絵本、世界地図など計206冊を提供した。



学校に届けられた絵本を手に取り笑みをこぼすシバトゥ村学校の生徒たち



寄贈された書物は、生徒たちの読書の時間に利用される



図書室を管理する教員（右）も図書寄贈に感謝の意を表していた



写真とダリ語メッセージが本棚の上に丁寧に飾られた



### ～サイガン郡・教員資料室～

サイガン郡教育局内に新設された教員資料室は、同郡の学校教員約200名が自由に行き来でき、必要に応じて蔵書を利用することが可能である。SCJは、教育局局員や教員たちに聴き取り調査を行い、現地で最も必要とされている教授法資料や文献、パシュトゥ語やペルシャ語などの辞書、さらには数学や物理、歴史などの各教科の副教材書物を計80冊提供した。



教員資料室には教員向け書物が届けられた



本棚には真新しい教材が並び

### ～サイガン郡・女子識字教室～

SCJが現在サイガン郡で運営管理している女子識字教室の全10教室（生徒数179名）に対して、ダリ語習得の副教材としてBBC出版 Books（38タイトル）とその他の絵本（10タイトル）計580冊を提供した。それらの絵本は“紀香絵本箱”とともに各教室に手渡された。識字教室の生徒たちはその絵本箱から読みたい絵本や好きな絵本を借りて家に持ち帰ることができるので、以前よりも文字を読む習慣や読み書きを練習する時間が増え、毎日の識字学習に大いに役立っている。



僻地コガドイ村の子どもたちの元に紀香絵本箱が届いた



紀香絵本箱と絵本寄贈の経緯を子どもたちにわかりやすく伝える現地職員



絵本に見入る識字教室の生徒たち — ホジェガンチ村



絵本は計48タイトルで、小学校低学年から高学年レベルまで楽しめる



絵本と絵本箱を受け取ったナフバッド村の生徒たち



「タシャクール（ありがとう）」 — オロチ村



絵本を手に取り、習いたての文字を読むロピア — ホジェガンチ村

「学校に通うことができないから、識字教室で初めて文字を習っているの。家ではいつもお掃除や洗濯、ご飯作りのお手伝いをしているわ。お友達と一緒に新しいことを習うのは、とっても楽しい。将来は、学校の先生になりたいな」

ロピア（9）



## 5. シバトゥ村を再訪問

2007年11月、SCJはシバトゥ村学校への図書寄贈を終えた後、そのままシバトゥ村を訪問し、同年1月に「藤原紀香さん結婚お祝いメッセージ」を送ってくれた子どもたちと再会した。子どもたちに藤原紀香さんからの写真メッセージやステッカーを手渡すことができ、また紀香基金による図書寄贈事業が、今回シバトゥ村を含むバーミヤン州で行われたことについても直接伝えることができた。子どもたちは藤原紀香さんからの直筆メッセージと写真を興味深げに眺め、自分たちの写真ステッカーを受け取ると、はにかみながらもとても嬉しそうな表情を浮かべ喜んでいた。



11月、冬を目前に控えたシバトゥ村



弟妹の世話をするシバトゥ村の子どもたち



マルズィア（13）とラヘラ（13）、ナウローズ（11）



左側からジャリル（9）とその兄弟たち



マルズィアは絨毯織りや家事のほか、村の識字教室に通い始めた



自分たちの写真ステッカーに興味津々



文字を読む青年が藤原紀香さんからの直筆メッセージ（ダリ語翻訳）を子どもたちに読んで聞かせてくれた



子どもたちは、藤原紀香さんがシバトゥ村で撮った写真に釘付け



居間にはマルズィアが毎日使う絨毯織りの手動機械が横たわっている



絨毯織り機の柱に貼られたステッカー



## 6. 会計報告

本基金からの寄付金は、アフガニスタン事業を実施運営するための経費に活用させていただきました。寄付金余剰額は2008年に繰り越し、引き続きアフガニスタンの子どもたちの教育支援事業に利用させていただきます。

収入		
2006年寄付金	1,770,790 円	
2007年寄付金	8,528,884 円	
合計	10,299,674 円	(A)
支出		
2007年アフガニスタン事業運営費	6,135,536 円	(B)
繰越金 (A-B)		
2008年繰越金	4,164,138 円	

<了>

<sup>i</sup> ANSO, 2007, Quarterly Data Report (Q.3-07)

<sup>ii</sup> UNICEF, 2007, News note on 21 Mar, Millions of Afghan children head back to school, [http://www.unicef.org/media/media\\_39160.html](http://www.unicef.org/media/media_39160.html)

<sup>iii</sup> Oxfam, 2006, Free, Quality Education for Every Afghan Child, Oxfam Briefing Paper 93

<sup>iv</sup> HRRAC, 2004, Report Card: Progress on Compulsory Education; Grade 1-9, p4

<sup>v</sup> UNICEF, 2004, Moving Beyond 2 Decades of War: Progress of Provinces, Multiple Indicator Cluster Survey 2003 Afghanistan